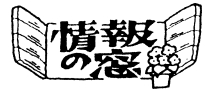


国際会議 ICCOPT 2016 Tokyo開催の経験と教訓 (6)



—会場校として、また、諸々のこと—

土谷 隆 (政策研究大学院大学)

1. はじめに

昨年、MOSが主催する三つの国際会議の一つである、連続的最適化に関する国際会議ICCOPT 2016 Tokyoが8月6日から11日まで政策研究大学院大学と国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された。1988年に東京でISMPが開催されてから28年後のことである。私はISMPでは実行委員会の末席で田邊國士先生の指導のもとで仕事をしていましたが、今回は水野先生、村松先生とともに、共同実行委員長ということで全体を見る立場となった。8月6日から7日に国立オリンピック記念青少年総合センターで開催されたサマースクールについては吉瀬先生が詳しくお書きくださったので、政策研究大学院大学（以下GRIPSと記す）で8月8日から11日まで開催された、会議本体について関わったところを中心に記してみたい。

2. 開催地決定まで

ことのはじめは2013年7月、第4回ICCOPTがリスボンで開催される数カ月前に遡る。リスボンの次のICCOPTの開催地を決定するためのMOS ICCOPT Steering Committeeでの議論が始められた。そして、日本にも、開催地としての可能性を探ってほしい、という打診があり、今回組織委員長・共同実行委員長を務められた水野先生を中心として関係者が議論した結果、政策研究大学院大学を会場として立候補することとなった。実は、私自身がICCOPTのSteering Committeeのメンバーであったこともあり、実際の会場の選考では、私自身が所属している大学である政策研究大学院大学での開催の提案をしていたために（そのように求められたわけではないが）Steering Committeeではメールでの議論を見守るしかない立場となった。（日本での検討打ち合わせでも沈黙していたが、会場候補校として会場地図などは提供していることもあり微妙な立場であった。）Steering Committee

での議論の中身は申し上げられないが、地理的なバランスから、できればアジア・太平洋地域から、という流れがあったこと、そして、複数の提案の中から選ばれた、ということくらいは申し上げてもよいと思う。世界有数の大都市である東京の一等地である六本木での開催、という点はある程度アピールしたと感じている。開催にあたっては、会場が小ぶりである最大のホールの収容人員が300名程度と少なめであるために、開会式やPlenaryなどに全員が参加できるように遠隔中継のような工夫をすること、高物価の東京での開催であるがゆえに、重要な社交の場であるバンケットをうまく運営することが、宿題として求められた。

3. 会場の確保

2013年春に学長の了解をいただいて開催地として立候補し、事務局にも相談して、大小取り混ぜて20程度ある教室のうち、早くから可能な限り多く（ほぼ全部）の部屋を仮押さえた。GRIPSは夏学期があるが、お盆前ということで、会議の時期もそれなりの数、集中講義が行われるので、会場のキャパシティが心配であった。実際には、想定していた参加者450名から500名程度を大きく上回る、過去最高の680名の参加があり、セッション数もそれに応じて増加し、その危惧は現実のものとなった。特に前述の定員300名のホールが一つあるほかは、100人超入の教室が二つしかなく、Plenary講演については、明らかに収容できない可能性があるため、同時中継をすることが絶対条件となる。また、このままでは、2セッション同時に講演があるSemi-plenary講演の一つが狭めの会場になってしまうことは否めない。また、セッション会場となる教室についても、発表数が増大した場合に、夏学期のスケジュールによっては、やりくりが非常に厳しくなる可能性があった。

これらの事情から、大学に隣接している国立新美術館に目をつけ、同館の定員260名の講堂と研修室を借

りることを計画した。実際に借りられるかどうかわかるのが会議の2カ月前の6月1日ということで、プログラム編成上かなりギリギリのタイミングであったが、無事に借りることができ、結果的にはよい雰囲気の会場でSemi-plenaryを行うことができた。新美術館は曲線美の美しい建物で、ちょうどルノアール展などもやっていて、大学と新美術館、ごく近い2会場を往来するという今回の設定は中々よかったのではないかと、思う。

結果的には、発表件数が530程度、最大18セッション平行、過去最大の大会となり、教室が足りるかどうか、最後まで冷や汗のものであったが、大学当局に最大限の配慮をいただいて、セッション用の教室を何とか確保して、夏学期の授業と並行しながら、ギリギリやりくりできたように思う。ただ、あまりに講演が多かったために、講演時間は、30分から25分へと短縮せざるを得なかった。これについては、特に不満もなく受け入れられていたように感じている。ちなみに、今回のICCOPTの参加人数は、約700名を数えたISMP 1988に匹敵するものである。ISMPが離散と連続両方の最適化を含めた世界大会であることを考えると、いろいろな意味で30年近くの間の変化を考えさせられる。

4. 会場についての諸々のこと

研究発表のセッションは、GRIPSでは、大きなホールや受付、飲食場所がある1階と、多くのセッションが行われる5階を軸として行われた(4階でも2セッションを開催した)。また、新美術館では講堂と研修室(1室)でSemi-plenaryといくつかのセッションが行われた。会場のキャパシティがぎりぎりということもあり、GRIPSの1階と5階の間で動線を考えたときに集中混雑が起こることがないか、とか、トイレやゴミ箱が十分に足りるか、など、普段は何も気にしないようなことが、かなり気になったが、ゴミ箱については使い捨てのごみ箱を設置し、また、特にトイレが混雑することもなく、実際には問題なく終了することができた。大学を普段利用している学生の人数がほぼ参加者と同じ数であるということを考えると、大きな混雑は起こらない、ということだったのかもしれないが、やはり不安にはなるものである。コーヒーブレイクは1階と5階の2カ所で行った。場所が少なく混雑して混乱することが懸念されたが、これも、特にトラブルなく、順調に済んだと思う。

これまで何度か書いているように、会場のキャパシティがぎりぎりであったことで準備はかなり綱渡り的であったが、結果的には、コンパクトな会場であったために、研究者同士が会場で常に一緒にいる感じになり、手前味噌にはなるが、その点は大変よかったように思う。(逆に、大きな会場であれば、キャパシティに余裕はあるものの、会場が広くて分散する、というような問題点はあるかもしれない。)コーヒーブレイク以外の時間も常に多数の研究者が1階のカフェテリアに待って談笑したりディスカッションしたりしている姿を見るのは嬉しいことであった。また、周辺には美味しいレストランも多く、その点は、十分に地の利を活かした運営ができたのではないと思う。

一番酷暑の時期の開催ということもあり、会場では、ペットボトルの水は自由に取って飲めるように用意されていた。さらに、特別のおもてなしサービスが、飲食用のホールに用意された、日本が誇るB級デザート「ガリガリ君」である。参加者に自由にエンジョイしてもらおうと、ガリガリ君約1,200本を飲食用ホールに用意し、冷凍ケースから取り出していつでも食べられるようにしたサービスであったが、ガリガリ君を片手に談笑する研究者の姿が多々見られ、中々楽しい企画であったと思う。最終日に300本くらい余ったが、これは、大学の冷凍庫で保管され、会議終了後一月ほどの間、大学職員一同ガリガリ君食べ放題、ということで、それなりに、大変お世話になったGRIPSの皆様がエンジョイしてくださったようである。

酷暑ということであれば、後に知ったことであるが、会議の二日目あたりは天候もよく、気温も上がり、参加者も多かったこともあり、普段は一度には使わないホールや大きな部屋に冷房を同時に入れることになったため、大学の電気使用量がぎりぎりのところまでいって一歩間違えるとブラックアウトという状況にもなっていたということであった。このようなピンチも大学の設備や防災センターの皆さんの見えないところでのご尽力のおかげでなんとか切り抜けることができたことを後で聞いた。このような形で会議を背後で支えてくださった関係者の皆様にはひたすら感謝あるのみである。

5. 中継について

最初に述べたように、会場のホールが小ぶりであったために、Steering Committeeの要請もあり、希望する参加者全員が少なくともホールでの講演やイベン

トを視聴できる中継を行う必要があった。そのために、開会式やPlenaryはホールの近くの部屋に第2会場を設けて中継された。失敗が許されず、大きなトラブルがないことが何よりも大事なので、簡単に、スライド映写と音声を中心にして、時々、舞台と講演者の映像に切り替える、という比較的簡素な形をとった。これらについては、GRIPSのネット配信のシステムを利用した。しくじると大変なことになるので、入念にリハーサルを重ねたものの、直前まで音声出力が十分に出来なかったり、かなりの綱渡り状態であったが、会期中を通じて何とか大きなトラブルなく終了し、安堵した。また、Best Paper Prizeの候補者のセッション（その中から1名Best Paper Prizeが選ばれる）については、表彰委員長と表彰委員1名が参加できない、ということで、アメリカとイギリスに中継することになり、そのために、GRIPSのネット配信のシステムを外に解放し、さらに、スカイプを補助的に使用して、何とか無事に終了することができた。担当の後藤先生を中心とするチームが頑張られたとはいえ、プロでもないのにこんなことができるというのは、信じられず、まさに隔世の感がある。いずれにせよ、中継は失敗が許されず、また、そのために、かなりのプレッシャーとコストがかかるので、できればやりたくないものである。

6. バンケットについて

Steering Committeeからのもう一つの宿題が、バンケットであった。確かに、バンケットは会議のプログラムではないが、皆楽しみにしている大きなイベントである。ISMP1988東京では、参加者が料理の確保に苦労した、というような経緯があり、東京中心部という物価の高い場所で、皆を満足させるような料理と飲み物を提供できるか、ということが、東京開催にあたっての一つの懸念材料ではあった。

そこで、われわれが選択したのが、大学から徒歩約5分、安月給サラリーマンの味方である、六本木最大の居酒屋「松ちゃん」での開催である。当初は、電車で20分程度離れた、しかし企画側としては安心して任せられる無難な宴会場を考えていたが、それと完全に対極のコンセプトにある松ちゃん。これも大きな賭けであった。「生ビールジョッキ180円」の掲示が会場の至るところにあり、予約確認書の発行を頑なに拒み、〇百×十万円分の見積もり書やメニューも手書きで形式にこだわらない松ちゃん。店長が次々と変わる

松ちゃん。何度も委員会の後に下見をし、入念に打ち合わせを重ね（単に飲みに行っただけです（笑））、大受けするか白々とした空気が漂い撃沈するかどちらかだろう、と皆緊張のうちに当日を迎えた。

すし、さしみ、牛鍋を中心としたメニューで、数十もの牛鍋を暑い夏の中にも同時にやったもので、部屋全体、特に2階が暑くなりどうなることかと思っただが、結果的には、280名の参加で打ち解けた和やかな雰囲気の中に大変好評をもって終えることができた。樽酒の鏡割りをし、Best Paper Prizeの表彰式も行った。Steering Committee ChairのJong-Shi Pang氏もMOS前会長のPhillip Toint氏も大満足の様子で、バンケットの成功は、われわれも大変嬉しかったことの一つである。特に、Phillip Toint前会長が私たちにかけてくれた言葉「The conference was good, the venue was fine, and the banquet was excellent!」が忘れられない（笑）。松ちゃんへは大学から細い路地を通って行くが、華やかな六本木の町の通りをちょっと入ると、庶民的な雰囲気の路地が連なっている、このあたりの雰囲気もdeep contemporary Japanese cultureを感じさせ、海外の皆さんにとっては興味深いものだったのでは、と考えている。

7. Conference Booklet

順番が前後するが、準備の中でそれなりの比重を占めたのが、Conference Bookletである。これについては、挨拶やオーガナイザー名簿、会議の説明、会場地図、といった固定的な部分と、アブストラクトやプログラム、索引など、データを流し込んで作成する部分がある。こちらで全部TeXで組み、カメラレディとするのがよいのか、それとも、印刷業者にデータを渡して、組んでもらうのがよいのか、判断に迷うところであった。今は、われわれの手間を厭わなければ、TeXやExcel、Wordでかなりのことができるので、両者の得失の見極めが難しいのである。

われわれがお願いした業者の場合、簡単なTeX記法には対応できるが、基本的には別の組版システムを用いているという様子で、正直、いま一つ何ができて何ができないのかが明確ではなく、困惑した部分があった。打ち合わせのときにも、「○○ができますか?」「できます。」ということに対するお互いの認識が異なることがあり、その部分のギャップは実際に作業を始めてみないとわからない。

結果として、5月頃から打ち合わせを始めて、何度

もやりとりをして、固定的な部分を組み上げつつ、データベース部分については予備的なテストを行って仕上げていき、6月20日ごろにデータの最終版を渡し、7月中旬に最終版が印刷にまわり、会議の一週間前に完成の運びとなった。その過程では、プログラム委員の後藤先生、高野先生、奥野先生のご協力、また、校正など、メンバー全員の何らかの意味での助力を仰いで何とか完成にこぎつけることができた。この部分に限ったことではないが、特にプログラム小委員長の後藤先生の諸方面における獅子奮迅の働きには瞠目しひたすら感謝あるのみであった。

細かいところでは、Google Mapやゼンリンの地図を掲載するにあたって、許諾を改めて得る必要があるのかどうか、というあたりまで気になり、議論した。業者も頑張ってくれたが、一度TeXで用意した原稿をもう一度、相手が組み直す、といった類の二度手間となる作業も多く、そういった意味では、われわれが全部TeXのソースファイルから作成して、カメラレディの形で、自分たちで行うという選択肢もありだったかと思う。どちらがより効率的か、それは実際にやってみないとわからないことではあるが。

以下、完全に余談である。ISMP 1988東京のブックレットは、私が下働きでプログラム部分の組版をカメラレディで準備したのだが、委員の皆様からお知恵をいただいて、データベース (dBase III) からTeXソースコードを自動的に作成して印刷する、ということをやっていた。今にして思うと、当時としては、相当進んだことをしていたように思う。

8. オーサズキットについて

参加者に配布するオーサズキットについては、福田先生が中心となって準備を進められた。準備委員会でもそれなりに議論して、最終的に、ロゴ入りのトートバッグ、ロゴ入りの手ぬぐい、ロゴ入りのフリクションボールペン、ロゴ入りのうちわ、名札、領収書、名札ホルダー、(市販の) ノート、英語の東京の地図とガイド ((公財) 東京観光財団が無料で用意しているもの)、参加・発表証明書を参加者ごとに用意して登録時に渡した。

事務処理上の煩雑さを避けるために、参加・発表証明書を会場での受付時に渡したが、実際には、友人が受け取ったりしていたこともあったようで、悪意に利用されると、トラブルの元になりかねない。パスポートの提示などを求めて本人確認をしつつ、スムーズに

受け渡しができるればよいのだが、これは、中々難しい問題である、ということも感じた。

これらのキットは会議の数日前に基本800セットを委員と学生アルバイトで作成したが、かなりの作業量と置き場所を必要とするものである。福田先生のところから大学に届いた段ボールは20箱以上となった。幸い、会議前約一週間から会議中にかけて、学内で準備用に50平米程度の部屋を準備用に使わせていただくことができ、気を使わずにいろいろなものをそこに自由に集積することができ、大変にありがたかった。

9. 参加者へのホテルの用意

インターネットによる予約などが容易に可能となっていることもあり、どの程度委員会のほうでホテルの手配をするかについては、加減が悩ましい問題であったが、武田先生が担当し、いろいろとご尽力いただいて、JTBに依頼して面倒をみてもらうことになった。JTBでは武田先生と打ち合わせのうえ、会場に比較的近い宿を用意し、そして招待講演者についてはこの宿に宿泊するように手配し、一般参加者についても、30部屋程度用意して予約対応することとなった。JTBが用意したサイトから宿泊予約、支払いなどができるようになっており、委員会としては招待講演者の宿泊手配を除いてはほぼノータッチであった。このほかに、主として学生参加者への便宜を図るために、国立オリンピック記念青少年総合センターに格安の宿舎を確保した。こちらについては吉瀬先生がご尽力くださった。

10. 総括

大きなトラブルもなく、会議は成功のうちに終了した、といってよいと思う。3年間準備にかかり、大体の印象であるが、最初は1~2カ月に一度くらい、昨年後半から本年に入ってから1カ月に一度、4月以降は2週間に一度、といったペースで政策研究大学院大学で委員会を開催した。最初の1年くらいが趣意書作成や種々委員会の立ち上げなど、2年目がホームページ作成や募金集め、参加者キットの作成、3年目の前半がwebによる発表登録・課金システムの設計、大会プログラム枠の設計、パンケットの検討、最後の半年が、全システムの稼働、発表受付、ブックレット作成、最終準備、という感じであったかと思う。決断力のある水野先生のリーダーシップのもとで、各メンバーそれぞれの持ち味を活かして、チームワークよく動くことができたのではないだろうか。

今回の成功は、各委員の皆さんが、全力を尽くした結果であることというは言うまでもないが、特に、村松先生には、共同実行委員長としてweb関係、講演者や参加者との連絡、受付関係、総務関係と大事なところを中心となってまとめていただき本当に頼りになるゴールキーパーであった。吉瀬先生は、サマースタール全般のとりまとめ、大変な人数の参加者宿泊の手配と期間中の管理などをしていただいた。先に述べたが、後藤先生はプログラム作成のみならず、ブックレット作成、中継や進行など、さまざまな場面でキーパーソンとしてとりまとめをしてくださり、八面六臂の活躍をされた。ほかの委員の皆さんも、まさに、意図したわけではないが、適材適所にはまった形で成功に向けて尽力され、一丸となったよい雰囲気最後まで駆け抜けることができたと思う。このようにして、各委員がお互い、委員会や会議の準備を通じて、研究会で顔を合わせたり飲みに行ったりするというとは一段違うレベルでお互いを知り合うことができたことも大きな財産である。これを、今後、共同研究などさまざまな形で活かしていくことができれば、と思う。

また、国際会議を日本で行うこと自体が学術的な貢献であろう。やはり、ホスト国をすることで、学術的な意味とはまた違うよい意味でのコミュニティへの存

在感を示すことができる部分があったのではないかと
思う。人的ネットワークが研究において非常に重要であることを考えると、これも大事な財産である。幸い、日本OR学会からは、今回過分なバックアップをしていただくことができ、大変心強かった。今後、OR学会のいろいろな分野でICCOPTのような国際会議の開催が続けられれば、国際学界における日本の存在感を示すことができるのではないかと、思う。

11. 謝辞

駆け足での報告となったが、本原稿の最後を、会議に協力していただいた皆様への感謝で締めくくりたい。筆者の所属先の政策研究大学院大学には、会場の使用や教室、施設の運用にあたり、会議成功に向けて可能な限りの便宜を踏ってご協力いただき、言葉に尽せないほどお世話になった。ここに深甚たる感謝の意を表したい。国立新美術館にも会場を使わせていただき大変お世話になった。この場を借り、改めて厚く御礼申し上げたい。また、多くの企業から厳しい時期にもかかわらず貴重な寄付金をいただいたことに、心より感謝の意を表したい。そして、世界中から遙々日本に集ってくれた680名の参加者の皆さん、本当にありがとう！